



くすりと健康

一般社団法人
神戸市薬剤師会

抗血小板薬

けがなどで出血した時に、いつまでも出血がおさまらないと、血液が失われて生命にかかわる状態になりかねません。そのため、身体には血液が失われないように出血を抑える止血という仕組みがあります。止血には、「血小板」と「血液凝固因子」がかかわっており、血小板は血管が傷ついたときに傷口にくっつき、血小板同士が集まって傷口をふさぎます（一次止血）。さらに血液凝固因子が働き血液の塊（血栓）を作って出血を止めます（二次止血）。普段は、血管の中で血栓ができることはありませんが、動脈硬化などにより血管の内壁が傷ついたり、長時間座ったままなどで足の血液の流れが滞ったりすると血栓ができやすくなります。大きな血栓ができて血管をふさいでしまうと、そこから先に血液が流れなくなり組織の細胞が死滅します。この血栓は、できた場所で大きくなり

そのまま血管をふさいでしまつこともありますが、元の場所から剥がれて血液の流れに乗って、別の細い血管をふさぐこともあります。

血栓ができるのを予防する薬は、「抗血小板薬」と「抗凝固薬」がありますが、動脈硬化などによりできる血栓予防には主に抗血小板薬が使われ、血液が滞ることによってできる血栓予防には主に抗凝固薬が使われます。この違いは、「ずり応力」という血管の摩擦力のような力が関係しており、ずり応力の大きな動脈などでは血小板が、ずり応力の小さい静脈で血液が滞っているようなところでは血液凝固因子が、重要な働きをするためです。

主な抗血小板薬は働き方の違いによりいくつかの種類があり、効果を高めるために2種類組み合わせ使用することもあります。

アスピリンは、血小板の働きを活発にするトロンボキサン₂という物質を作るときに必要なシクロオキシゲナーゼという酵素の働きを抑えて、血小板

が活発に働くのを抑えます。

チエノピリジン系抗血小板薬は、アデノシン二リン酸（ADP）という物質が血小板の表面にある受容体という鍵穴のようなものに結合すると血小板同士がくっつくのを促すのですが、これらの薬はADPが受容体に結合するのを防ぎます。

シロスタゾールは、CAMPTという物質が分解されるのに必要なPDE3という酵素の働きを弱めてCAMPTの濃度を上昇させます。CAMPTは血小板同士がくっつくのを防ぐ働きがあります。

ほかにも違う作用の抗血小板薬はありますが、いずれの薬も血小板の働きを抑えるので、出血した時の止血にも影響を与え、血が止まりにくくなります。これらの薬を服用している方が、手術や抜歯など出血を伴う治療を受ける場合には、薬を一時中止するなど医師の指示に従ってください。

（北区）薬局エビノファーマシー

松本博志